

コンテンポラリー・ダンスワークショップの過程分析

児玉孝文* 野邊壮平** 野邊麻衣子*** 竹内 元**** 高橋るみ子*****

Analysis of contemporary dance workshop process

Takafumi KODAMA Souhei NOBE Maiko NOBE
Gen TAKEUCHI Rumiko TAKAHASHI

はじめに

コンテンポラリー・ダンスは、モノや事柄と人との新たな関わりを築いてそれらと自己の内的真実を探求し表現するアートである。子どもたちの日常生活のいたるところにHip-Hopやストリート・ダンスのようなリズム系のダンスが氾濫し、ダンスという行為が消費の対象となっている。現代にあって、意味を問いかける機会を与えるという点で、コンテンポラリー・ダンスの基礎を学ぶ教育は、ますます重要になる。

新しい学習指導要領（平成20年度改訂）では、中学校「ダンス」が必修化となり、それに伴い小学校での「表現リズム遊び」と「表現運動」に関わって学校段階の接続を踏まえた指導内容が明確に示された。必修化となる中学校「ダンス」への接続を踏まえた小学校「表現運動」の在り方や指導の改善が求められている。現職教員の多くは表現系のダンスを教えることに苦手意識をもっており、小学校の多くは、運動会で発表する表現やダンスの練習の時間を「リズムダンス」や「表現」の時間に充てている現状がある。

そこで、著者らは、コンテンポラリー・ダンスの基礎を学ぶ新たな教育プログラムを開発し提案した。プログラムは、コンテンポラリー・ダンスワークショップとワークショップの成果発表を含む鑑賞教室で構成されている。研究では、川南町立通山小学校で実施したコンテンポラリー・ダンスワークショップを分析し、プログラムを成立させる条件を明らかにする。なお、本研究は、ワークショップ講師側の分析であり、子どもの学びの分析は他日を期したい。

* 宮崎大学大学院教育学研究科院生

** NPO法人MIYAZAKI C-DANCE CENTER

*** 串間市立大東小学校

**** 宮崎大学大学院教育学研究科

***** 宮崎大学教育文化学部

1. 通山小学校のコンテンポラリー・ダンスワークショップの概要

川南町立通山小学校は、ニューフロンティア教育研究会（川南町教育委員会主催）の一環として、子どもたちの体力向上を目的とした活動と表現運動につながる活動を含むようなプログラムの可能性を探っていた。著者らは、通山小学校の意向を踏まえ、コンテンポラリー・ダンスワークショップとワークショップ講師による鑑賞教室で構成するプログラムを提案したところ、実施の運びとなった。また、通山小学校の6学年担任の一人が、過去に「んまつーパス」の作品を鑑賞していたことも、提案したプログラムの実施につながったと思われる。通山小学校のコンテンポラリー・ダンスワークショップの概要は<表1>の通りである。

<表1>

実施日	2008年3月4日水曜日
場 所	宮崎県川南町 川南町立通山小学校 体育館
講 師	んまつーパス（みのわそうへい、児玉孝文） TA（教育文化学部学生5名）
対 象	川南町立通山小学校6学年全児童 男子25名 女子23名
内 容	コンテンポラリー・ダンスワークショップ
時 間	45分

ワークショップに連続させる形で鑑賞教室を計画した背景には、ワークショップの成果発表の場として鑑賞教室を設定することで、ワークショップに出席する子どもたちの参加意欲を高めたいとの思いがあった。また、小学生にも身近なダンスであると感じてから鑑賞教室で鑑賞するコンテンポラリー・ダンスを観てもらいたいという思いがあった。加えて、鑑賞教室でワークショップの成果発表をする意図は、ワークショップに参加できない児童（1～5年生）にも、鑑賞教室で踊る6年生の姿を観て、実際に舞台上に立つ6年生ほどではないにしてもダンスを身近なものとして捉えてほしいという思いがある。

ワークショップで取り扱う教材には「暑い国から来たスパイ」を選んだ。この教材は、平成17年にすでに同様の形で実施・発表し、ワークショップで扱う教材としての有効性を実感している。「暑い国から来たスパイ」には、コンテンポラリー・ダンスの要素が凝縮されており、初めてダンスを体験する子どもたちでもすぐに表現の世界へ誘うことができる。さらに、簡単な動きで構成されているにもかかわらず一曲（約4分）通して踊るだけで十分な運動量がある。運動能力は低くなく、体を動かすことは好きで、通山小の子どもたちの体力向上にもふさわしい教材である。ワークショップのプロセスは、以下<表2>の通りである。

<表2>

ワークショップ開始
1. ワークショップの概要の説明
2. 講師自己紹介
3. ワークショップの内容の説明
4. 準備運動

5. 教材「暑い国から来たスパイ」の開始
 - 5-1. ドレミ分け
 - 5-2. 紙を使って説明
 - 5-3. 演示・鑑賞
 - 5-4. 感想と説明
 6. 全体での通し
 7. 課題の発見と伝達
 8. 全体での通し
 9. グループ分け
 10. グループ用小道具渡しと説明
 11. 見せ合い
 12. 課題
 13. 次の指示
- ワークショップ終了

コンテンポラリー・ダンスワークショップを行うにあたり、事前に担任と打ち合わせを行い、以下のような情報を得た。

- ・表現（ダンス）の授業が実際にはしっかりとできていない（運動会の練習はしている）という現状。
- ・子どもたちは、控えめで恥ずかしがりだが体を動かすことは好きで運動能力は低くない。

このような実態から、子どもたちにワークショップに対する関心を高め、期待感をもって当日を迎えられるような手立てが必要であると考えた。本ワークショップで扱う教材「暑い国から来たスパイ」に関する事前準備として以下に示す二点を担任に依頼した。

一つには、「スパイ」から思い浮かべる自分なりのイメージをことばにし、学級全員のイメージを模造紙に貼り提示しておくことである。イメージをことばにするにあたり担任にはありきたりなイメージにとらわれない子どもたちの自由な発想を大切にしてほしいと伝えた。子どもたちの事前に思い浮かべた「スパイ」のイメージは、〈表3〉の通りである。

〈表3〉 模造紙の内容

黒い、うそつき、極秘、サングラス、暴力、極悪、追跡、かっこいい、変装、人影、素早い、親しいふり、マスク、強い、目立たない、怖い、コソコソ、情報集め

「スパイ」から思い浮かべた自分なりのイメージをことばにする作業は、ことばにするうちに、子どもが、自分が表したいものの形や様子、あるいはその動きが見えてくるため、「スパイ」の場合も、スパイのイメージをことばにすることで、表現の経験や表現の授業体験の少ない子どもたちのワークショップへの不安感を軽減させ、ワークショップへの期待感をもたせることができる。また、個々の「スパイ」のイメージを模造紙に貼りだす作業は、友だちのイメージする「スパイ」をお互いに知ること、自分の「スパイ」のイメージが広がるだけでなく、自分と同じイメージをもつ人もいるという安心感を子どもたちに与え、ワークショップ当日に安心し、かつ自信を持って動くことができる。一般的なワークショップで行われる「その場で体験し踊る」という形態ではなく、こうした事前の作業を課した背景には、「考えてきたものや具体的にイメージしてきたものを創り・踊る」という学校教育の表現運動領域の授業に少し

でも近づけることで、今回のワークショップへの期待「表現運動へつなぐ」に応えたいという思いがあったのである。

二つには、子どもたちがイメージした「スパイ」に相応しい衣装や小道具を自宅から選んで持って来ることを指示した点である。できるだけ黒っぽい衣装や、サングラスや帽子など、普通であるならば子どもは使わない小物も持ってきてもらったのである。発表で統一感を持たせるためでもあるが、それ以上に、衣装や小道具で“スパイ”らしく装うことで、子どもたちがいつもとは違う世界で、いつもとは違う自分に出会う体験をしてほしいという思いがあった。こうした事前の依頼は、45分という時間でワークショップをスムーズに行い、子どもたちの学びを確保するという事前準備であるが、特に「子どもたちがイメージした『スパイ』に相応しい衣装や小道具を自宅から選んで持ってくる」という依頼は、体育の授業に体育着ではない服装で臨み、友だちはどんな服装を選んでくるか、あるいは自分の服装を友だちはどのように見てくれるかといった期待とワクワク感を子どもたちに与え、子どもたちに45分以上の学びを与えるものでもある。¹⁾

2. コンテンポラリー・ダンスワークショップにおける導入の分析

通山小学校で実施したワークショップの導入は、次の通りである。以下の〈表4〉は、実施のワークショップを収録したVTRから導入の冒頭部分の指導者のことばを抜き出したものである。

〈表4〉

ちょっと、いつもの体育館とは違うと思います。
 今日、みのわそうへいと児玉孝文が午後踊るのですが、その中でみんなに何かしてほしいなと思って、スパイのこと、ちょっとスパイのイメージについて書いてきてもらいました。スパイって知って（い）ましたか？知って（い）ましたよね？大丈夫ですね。
 はい、じゃあ動く前に、一応自己紹介だけしておきます。
 はい、ここをみたら「おどすば」って書いてあります。えっと、「おどすば」って何の略かわかりますか？わかんないですよね？あ、そうです、踊るスポーツマンです。
 踊るスポーツマンということは、スポーツマンなん（の）です。みんなスポーツマンです。僕は野球をしています。こっちから順番にちょっと聞いてみましょう。
 児玉 = 僕はバドミントンを専門にやっていました。
 豊福 = 私は小学校のころからサッカーをしています。
 瓜生 = 私はずっと水泳をしています。
 坂田 = 私はバスケットの方をしています。
 崎 = じゃあ私は何をしていますでしょうか？僕もサッカーをしていました。
 後藤 = 僕もサッカーです。
 ちょっとサッカー部が多いですが、スポーツマン、スポーツをしています。なのでぜひ今日みんなに踊ってもらう時に、何かいろいろ体育の中で好きな動きがあると思います。バレーボールとかサッカーでもいいし、野球でも、何か好きな動きの中で、一生懸命、ダンスだからという訳ではなくて、スポーツの「グワァー」って走るときの動きを、この中でしてもいいし、一生懸命ちょっと終わった後に「ハァハァ」というくらい、一生懸命動いてほしいなという風に思っています。

ここでのポイントは、次の二点である。

一つには、コンテンポラリー・ダンスに対する子どもたちの興味・関心を読み取るうとしている点である。逐語記録からは、導入の部分に工夫がないように見えるが、ここには次のような意図がある。ワークショップは常に“飛び込み授業”になる。子どもの実態、学級の様子、学校全体の雰囲気などの情報を事前に得ることは難しい。本ワークショップにおいても、対象が6学年2学級の60人程度であり、表現運動の時間は運動会のダンスの準備に充てているという情報は、6年生の担任から事前の打ち合わせ面接で入手できたが、それ以外の子どもたちの表現運動に対する興味・関心といった情報を得ることはできていなかった。本ワークショップの導入は、授業の導入ではない。子どもたちのダンスに対する興味・関心を探ることが目的である。教師からすれば、工夫の見えない、意味のない時間のように思えるかもしれないが、ワークショップ講師自身が投げかけたことばに対する子どもたちの反応を表情や身体の様子も含めて読み取り、瞬時に、あらかじめ計画してきたワークショップの内容の修正を行っている。子どもたちの表現運動に対する興味・関心を読み取ることは、その後続くワークショップの成否を決める、不可欠な活動になっているわけである。

コンテンポラリー・ダンスのワークショップは、子どもの状況を見とることからはじまっている。子どもが体育館に入ってきて、どのように動くのか、子どもたちの身体や関係は、どのようであるか。ここでは、子どもを知ることが大切となる。学校に貼ってある子どもたちが描いた絵を見たり、学校の空気を感じたり、“こんにちは”というあいさつが強制されたものであるかどうかを見とったりしている。何気ない、たわいもない会話からワークショップははじまっている。子どもたちと身近に親密になろうとしているのではない。ワークショップでは、まどろっこしく、おずおずとした自己紹介になっている。子どもたちの日常に参加し、子どもたちにあたり前や常識、ルールを子どもたちの動きや関係から読み取っていくのである。

二つには、自己紹介の仕方という点である。例えば、音楽家は、楽器を弾いて見せたり、1フレーズを歌ったりするように、ダンサーも、“踊る”という自己紹介を期待するかもしれない。²⁾しかし、本ワークショップでは、踊らずに、ユニット名とワークショップ講師名、そしてそれぞれが専門とするスポーツ種目の3つを紹介しただけである。ここには、子どもたちがすでに持っているダンスやダンサーに対する認識を変えてから、ワークショップに参加してほしいという意図がある。近年の子どもたちのダンスやダンサーのイメージは、まずHip-Hopであり、次にバレエである。これは男子も女子も変わらない。特に、ダンサーはバレエダンサーだけであるというイメージを払しょくすることが大切となる。今日のワークショップ講師が自分たちと同じようにスポーツをしている“普通の人”だという点を、ワークショップが始まる前にしっかり印象づけることは、後に続くワークショップの成否を決める大事なところである。なぜならば、子どもたちの前で見事に踊れば、子どもたちは感心してくれるが、その感心は感心のままで、“あの人たちだからできる”で終わってしまうからである。ダンサーが踊って自己紹介することは、子どもたちも自分たちのイメージで踊るという動機づけにはならない。ダンサーとは、バレエダンサーやHip-Hopダンサーだけではない。子どもたちは、ダンサーを、特別で限られた、変わった人と見ている点に注意が必要である。

本ワークショップの実施は、学校側からすれば体育授業の一つである。だがコンテンポラリー・ダンスワークショップは、授業そのものではない。授業では、最初に子どものダンスに対する興味・関心を引き出させようとするが、ワークショップでは、ダンスの誤った認識を引き寄せ

ることを避けるために、まずダンスに対する子どもの興味・関心を脱学習させるところから始める必要がある。ワークショップという場で講師がダンサーではなく、スポーツマンであることをことさら強調するのは、ダンスに関心をひきつけるのではなく、ダンスにひらかれている自分自身に興味を持ってほしいからである。

こうした意図をもった導入を行うのは、子どもたちにスポーツができる子どもならダンスもできるといったことに気づかせることを、表現の学習の第一歩ととらえているからである。学校におけるワークショップは、出席を拒否する自由がない。本ワークショップがとった導入は、出席させられた子どもたちをワークショップに参加させるための一つの手立てであり、相手を知り、子どもたちの参加を促すための活動なのである。

3. 「暑い国から来たスパイ」の活動過程の分析

本ワークショップで扱った「暑い国から来たスパイ」の活動過程をワークショップの様子を収録したVTRから見ると、折々でワークショップ講師から子どもたちへのことばかけに目がとまる。ことばかけはワークショップや授業においてもその活動の成否を決める重要なものである。以下<表5>に本ワークショップで講師が発した子どもたちへのことばかけを抜粋する。

<表5>

- ・「自分の音のところで、その他のところは、動きません。目線もキョロキョロせずに『バツバツ』ってずっと止まったままです。」
- ・音楽がなくなってからじゃなくてももう、構えておいてください。
- ・自分がスパイってこと忘れちゃって、手がこんな、こんな（ふうに）なっちゃってる。
- ・手も低い所にあると、あんまり目立たないのでできるだけ自分の目線に入るように動いてみよう。
- ・カッコいいスパイになりますね。
- ・最初に歩くところがあります。もう少し歩いてもいい。
- ・音を鳴らさずに素早く動く、走る時もそうやって。もう少し、自分がどうやって動かか、こうやって歩いたら全然スパイに見えないし、こうやって歩いてもスパイに見えないのでちょっと考えて歩いてみてください。
- ・なぜ自分はここでジャンプをするのかなぁという設定をしながら動いてみるとジャンプも楽しくなる。

これらのことばかけは、例えば、「もっとスパイの特徴をとらえて動こう」「スパイのイメージを強調するように動こう」「動きに変化や起伏をつけて動こう」「動きを繰り返して」「動きに強弱を付けて」、あるいは「スパイになりきって」「もっとスパイらしく」や「もっと自由に動こう」「もっと元気に動いて」といった、一般的な指導に使われてきた目的をそのまま伝えることばではなく、また「スパイ」を「火山の爆発」に置き換えても使えるようなことばではない。ここでは、スパイならば「音を鳴らさずに素早く動く」のように、スパイの特徴を具体的に伝えることばかけや、スパイならば「敵（が）どこにいるかって見ながら歩く」のように、

スパイが置かれた状況が想像できるようなことばかけ、スパイなら「もう少し、自分がどうやって動くか、こうやって歩いたら全然スパイに見えないし、こうやって歩いててもスパイに見えないのでちょっと考えて歩いてみてください」のような、自分の動きや自分の様子を内観させるようなことばかけをしている。ことばかけによって子どもたちから「スパイ」らしい動きを引き出すようにしているのである。

以上のようなことばかけは、子どもたちの活動を促すための的確な指導言語であり、子どもたちの活動を上演へと導いている。また、こうしたスパイの特徴を具体的に伝える指導言語や、スパイが置かれた状況が想像できるような指導言語、そして子どもたちに自分の動きや自分の様子を内観させるような指導言語に加えて、活動の折々で数回にわたって演示を行っている。〈表6〉は、ワークショップ講師が行った演示をまとめたものである。ワークショップ講師による演示は、多くの指導言語を用いるより、1つの演示によって多くの指導言語に代わる情報を子どもたちに伝えることができる。

〈表6〉

<p>～ワークショップ講師Mの場合～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スパイのイメージが偏らないようにしよう ・動きの3種類が子どもたちにわかりやすいよう動く ・音と動きだしの関係が分かるように動く ・動いている時は、イメージ+精一杯の動き・ポーズをしよう ・止まっているとき（ポーズ）をカッコよく ・空間をうまく使う ・1人の部分とみんなや二人組の掛け合い等、その違いをメリハリをつけて動く ・興味を持ってくれるように動く（子どもたちの反応をしっかり見ながら）

ワークショップ講師は、子どもたちに実に多くのことを伝えようと演示していたことが分かる。例えば〈表6〉にある「動きの3種類が子どもたちにわかりやすいよう動く」や「メリハリをつけて動く」をことばかけしようとする、前者はまず音楽を聞かせ、動きだしのタイミングを教えなければならない。後者は子どもたちの動きの中のどの部分にメリハリがついていないのかを探すことをしなければならない。これらの項目を指導言語によって伝えるためには多くのことばと時間を要するであろう。このような演示を、ワークショップの随所で行い、活動の流れに応じた演示となるように形式を変えて行っている。〈表7〉は、演示が行われた箇所とその内容をまとめたものである。

<表7>

			講師の演示	形式	
1	ワークショップの概要の説明	×			
2	講師自己紹介	×			
3	説明	×			
4	準備運動	×			
5	「暑い国から来たスパイ」	5-1. ドレミ分け	×		
		5-2. 説明		踊り終わった後の様子	
		5-3. 演示・鑑賞		作品 講師と TA	子どもたちを座らせて
		5-4. 感想と説明	×		
6	全体での通し		「ド」と「ファ」の音の部分及び全員で動く部分とポーズ	子どもたちと一緒に、混ざって、リードして	
7	課題の発見と伝達		ピストルを構える身のこなし、足音をさせて走る 足音を消して走る等のスパイのふるまい	子ども集めて、ことばかけを交えながら	
8	全体での通し		「ド」と「ファ」の音の部分及び全員で動く部分とスパイのふるまい（四方八方に意識を張り巡らせて）	子どもたちと一緒に、混ざって、リードして	
9	グループ分け	×			
10	グループ用小道具渡しと説明	×			
11	見せ合い		掃除の人に扮したスパイのふるまい	子どもたち（半分）と一緒に、混ざって、リードして	
12	課題		「歩く ねらう」動き	子どもたちと一緒に小道具を持って、リードして、	
13	次の活動の指示	×			

こうしたワークショップ内の活動で演示を随所で行うことで45分という限られた時間内で、ことば以上の情報を子どもたちに伝え、実際に自分が踊る際にイメージしてきたスパイとワークショップ講師が行った演示の両者のすり合わせを行い、コンテンポラリー・ダンスの作品を踊るというプロセスを体験させているのである。

本ワークショップにおいて、ワークショップ講師は、演示を指導言語以上に重要視している。それは45分という限られた活動時間の制限も一つの理由だが、ワークショップに参加している子どもたちが授業では味わえない世界や、いつもとは違う自分に出会うような体験と、あとに

控える成果の発表の場である鑑賞教室での上演を、他学年の児童や担任以外の先生たちはどのように見てくれるかといった期待やワクワク感はことばだけでは体験させることはできないからである。限られた時間の中で、ことばでは伝えられない体験や上演という創造の戸口へ子どもたちを連れていくために必要なものは、目の前でワークショップ講師が動くスパイの様子を的確に表した「好ましい」、あるいは「カッコいい」と思える身のこなしであり、ふるまいのある演示であると考えるのである。

おわりに

研究で明らかになった、コンテンポラリー・ダンスワークショップが成立する条件は、以下とおりである。

- ・実施する学校の実態とそれに合わせた教材の選定及び事前準備が行われているか。
- ・初めて出会った子どもたちのダンスに対する興味・関心を表情や身体の様子から読み取り、必要に応じてワークショップの内容が修正できているか。
- ・ダンスにひらかれている自分自身に興味を持たせるために、ダンスに対する子どもの興味・関心を脱学習させる導入を行っているか。
- ・子どもたちの活動を促すための的確な指導言語によることばかけがなされているか。
- ・子どもたちが「好ましい」、あるいは「カッコいい」と思えるふるまいと身のこなしのある演示が行われているか。

今後の課題は、プログラムの成立条件を満たすことができるような、教員のための教育プログラムの可能性を探り、本ワークショップ講師に代わる教員や鑑賞教室で自作品の上演を希望する教員が増えることを期待したい。

注

- 1) 服装が非日常性をもたらす点については、次の文献でも指摘されている。今村克彦『今村組346人 - 俺を教師にしてくれた奴等たち -』たかの書房、1998年。
- 2) たとえば、自己紹介を踊りで表現しようとしてもしないコンテンポラリー・ダンスは、パフォーマンスやエンターテイメントではなく、アートであると考えからである。「こんなにすごい動きができるのだよ」と見せることは、コンテンポラリー・ダンスにとって重要ではない。